

教
育

第 **121** 号

定期総会・教育講演会
部会・委員会だより
各支部・各学校より
教育随想





改めて「実践に学び、実践を創る」

三河教育研究会会長 白井 博 司

新緑いよいよ深まり、風薫る五月、蒲郡市民会館にて、多くのご来賓の皆様にご臨席を賜り、「平成二十九年三河教育研究会定期総会・教育講演会」を盛会裏に終えることができました。

三河教育研究会は、昭和三十六年五月に産声をあげ、今年で五十七年目を迎えます。その間、三河小中学校長会、愛知教育文化振興会との連携のもと、多くの先輩方のたゆまぬ努力によって、「実践に学び、実践を創る」を合言葉に実績と伝統を築かれてきました。とりわけ、創設にかかわられた先輩方は、まさに寝食を忘れ、手弁当で努力されたとお聞きしております。「もしも、自分のために輝くなら、灯台は船を導くことはできない。」当時の先輩たちは、すべてこの言葉の体現者であったのではないのでしょうか。そして、三教研という組織の中で、後輩は先輩に学び、先輩は後輩に刺激を受けることで、切磋琢磨し合う教育風土

をより確かなものとしてこられました。この先輩各位の限らない英知とご努力によって、全国に誇り得る確かな組織が確立し、その活動に対して高い評価を受けてきました。

しかし、このような確かな組織をいただき、その恩恵に浴している時に陥りやすいのは、安住による自覚の欠如と惰性ではなからうかと思えます。三河教育の拠点である、三河教育会館が新たに完成した今、改めて会員一人一人が、三河の風土に根ざしたこの精神を受け継ぐとともに、新しい教育の創造をめざすことが私たちに課せられた責務ではないかと思えます。

さて、私たちがよく耳にする「三河の風土」とはなんでしょうか。質実にして剛毅という言葉でも表されます。以前、新潟県長岡市を訪れた時、三河に関する興味深い話を聴きました。長岡は、小泉純一郎氏が所信表明演説で引用した「米

消に向けた取り組みなど、私たちのまわりには様々な課題が山積しています。だからこそ、私たちが心してかからなければならぬことは、教育の原点に立ち返り、子どもたちの輝く姿を求めて「実践に学び、実践を創る」活動に邁進することではないでしょうか。

三教研は、地域を越え、世代差を越えて切磋琢磨する場であるがゆえ、学校現場の活力を醸し出す拠点であり得たと考えます。その中核を果たしてきたのが各部会であり、各種委員会です。各部会、各種委員会の活動が会員相互の学び合う場となり得ているのか、そして、各支部に刺激と示唆を与える存在であるのか、この一年じっくり腰を据えて、見直しを図る中で、よりよい部会・各種委員会があり方を考えていく所存でいます。

本部事業では、ミドルリーダー養成のための授業力養成講座の開催、ホームページによる夏季研修会や各学校で実践された学習指導案の提供など、会員の皆様に役立つ情報や知識を発信していきます。

フランスの小説家、ルイ・アラゴンが「教えるとは希望を語ること、学ぶとは誠実を胸に刻むこと」と言っております。十七万人の三河の子どもたちが希望に満ち、誠実に生きるよう、部会・委員会活動の充実を図り、三河の風土に根ざした実践者として、目の前の子どもたちとともに歩んでいこうではありませんか。会員各位のさらなるご支援をお願い申し上げます。

平成二十九年 度

三河教育研究会役員

会長 豊川 東部中 白井 博司
副会長 幸田 幸田中 伊藤 映充

顧問 北設 梅園小 高須 彰啓
西尾 設楽中 佐々木 尚也
會計監査 豊橋 南部中 宮崎 正道

幹事 豊田 藤岡南中 天野 明典
豊田 浄水中 片桐 常夫
豊橋 花田小 佐藤 淑乃

庶務 愛教大 附属岡崎中 鈴木 昌一
愛教大 附属岡崎小 松平 貴樹
愛教大 附属特別支援 村井 正照
愛教大 附属岡崎中 小笠原 真
愛教大 附属特別支援 浅井 英雄
豊橋 青陵中 安藤 直哉
岡崎 翔南中 神門 大知

◆評議員 (部会長)

国語 岡崎 常磐東小 近藤 嗣郎
社会 豊橋 中部中 藤井 直哉
算数 安城 安城南小 久永 克彦
理科 岡崎 岩津小 小島 寛史

(各種研究委員会委員長)

学習情報 豊田 童子山小 中村 正幸
学校図書館 安城 作野小 石原 紳
統計教育 岡崎 六ヶ美南小 大西 和夫
生徒指導 豊田 平井小 太田 恵市
へき地教育 北設 清嶺小 村松 忠男

(支部長)

豊橋 東陵中 市川 幸司
豊川 代田小 鈴木 和利
蒲郡 形原小 星野 佳昭
新城市 東郷東小 星野 真久
田原 神戸小 小川 守
北設 田口小 氏原 周次
岡崎 竜南中 永根 孝勲
碧南 鷺塚小 中根 明
刈谷 小垣江小 吉田 幸和
豊田 保見中 平林 輝久
安城 桜林小 清水 猛雄
西尾 鶴城小 鈴木 洋一

◆常任委員

知立 知立小 杉浦 邦章
高浜 南中 箕浦 博夫
三好 三好丘中 花井 伸彦
幸田 北部中 福田 安彦

総務委員会

委員長 蒲郡 形原中 水藤 彰啓
副委員長 豊川 音羽中 鈴木 富士子
委員 愛教大 附属岡崎小 柴田 昌一
安城 梨の里小 太田 忠宏
西尾 一色南小 横地 喜之
豊川 中部中 杉浦 滝三

広報委員会

委員長 岡崎 梅園小 高須 亮平
副委員長 愛教大 附属岡崎小 神門 大知
委員 岡崎 塩津小 稲吉 久美子
蒲郡 連尺小 鈴木 勝久
岡崎 北部中 加納 達朗
幸田 附属特別支援 松岡 史憲
愛教大 附属特別支援 都筑 太

調査委員会

委員長 幸田 幸田中 伊藤 映充
副委員長 豊橋 花田小 佐藤 淑乃
委員 愛教大 附属岡崎中 鈴木 佳樹
豊田 浄水小 仲田 英成
刈谷 富士松中 高畑 泰志
愛教大 附属岡崎中 小笠原 真治

平成二十九年 度

定期総会・教育講演会【報告】

五月十七日（水） 蒲都市民会館

五月十七日（水）、平成二十九年 度三河教育研究会定期総会・教育講演会が、約千名の会員と多くの来賓の先生方のご臨席を得て、盛大に行われました。

定期総会では、まず本年度の役員が承認され、白井博司会長を中心とした新体制が発足しました。白井会長はいさつの中で、三河教育研究会は「多くの先輩方のためまね努力によって、『実践に学び、実践を創る』を宣言業に、実績と伝統を築いてきた全国に誇り得る確かな組織としたうえで、『切磋琢磨し合う場である』と位置づけた創設当時の思いに立ち返り、三教研の核を果たす各部会、委員会の活性化」「ミドルリーダー養成のための授業力養成講座の充実」「ホームページによる三河教育研究会の活動や各学校で実践された学習指導案の発信」を、取り組むべき課題として述べられました。

さらに、ルイ・アラゴン氏の「教えるとは希望を語ること、学ぶとは誠実を胸に刻むこと」という言葉を引用し、十七万人の三河の子どもたちのために、三河教育の実践者としての誇りを胸に、情熱をかけて共に教育活動に取り組んでいこうと語りかけられました。

就任のあいさつに続き、ご臨席の来賓を代表し、愛知県教育委員会委員の

大須賀憲太様からご祝辞を、また蒲都市副市長の井澤勝明様には市長稲葉正吉様のご祝辞をご代読いただきました。

大須賀様からは、三河教育研究会は、三河の教育の核となつていられるとお言葉をいただきました。そのうえで、新学習指導要領の告示に伴い、先生方が十分に理解し、子どもが「わかった」「できた」とよりいっそう実感できるような授業をするために、これまで蓄積されてきた研究をさらに深めていくことへの期待のお言葉もいただきました。

井澤様からは、三河教育研究会は、教育に対するひたむきな情熱と常に先を見通した先駆的な研究活動を行っているため、三河教育をリードする大きな存在であるとお言葉をいただきました。

ご祝辞ののち、前年度の活動にご尽力いただきました前会長の水野達彦先生、前副会長の鳥居弘一先生に感謝状を贈呈いたしました。

それに続き、平成二十八年度の事業報告・決算報告、平成二十九年 度の事業計画案・予算案、会則十八条の改正について、すべての議案が賛成多数で可決されました。

当日は、多くの皆様のご協力により、盛会裏に終えることができました。

教育講演会

演題「やれる理由こそが着想を生む
『はやぶさ式思考法』」

講師 小惑星探査機「はやぶさ」プロジェクトマネージャー
川口 淳一郎氏

「何でも研究テーマ」

（リーダーで写した画像を示して）地球のそばを通過した小惑星です。名前はありますが、イトカワのような形をしています。このように、二つのボールが重なると、ダルマのような形になります。玉が三つ四つだったら、どういう形になるか想像してください。たぶん、専門家でもそう簡単に答えられないと思います。さらに、玉の大きさが変われば、形はガラリと変わります。それほど世の中は、誰も分からないものということです。大学生は、「何で団子がつつく形を研究しなければいけないのか」と思うらしいです。「誰しもがその場で答えられなかったら、何でも研究テーマだよ」は、私が学生に日頃言っていることです。

「物事は自由な発想が大事」

先日、ユナイテッド航空が世界中の問題をさらいました。オーバードッキングで一人多く乗せすぎてしまい、最後は力づくで乗客を引きずり降ろすという場面

がありました。ユナイテッド航空は「規則上では問題はない。乗客は降ろせるはずだ。ガバナンスを発揮したただけだ」と言うかもしれませんが。しかし、このようなことは、日本では起きにくいことだと思っています。日本の社会というのは、共同体のような「他人に迷惑をかけるべきではない」という意識があります。それはよいことですが、別の様々な弊害を生むと思います。この意識は、行き過ぎたガバナンスを緩和する要因でもあります。逆の行き過ぎを招いてしまうのではないかと思います。今、世の中は空前の「付度」ブームです。しかし、「付度」というのは創造性を阻みかねないと思います。行き過ぎた空気の読み方というのは、創造性を摘んでしまいかねないと心配しています。

「人間は、目先の状況を見て、行動をしがち」

昨年、ノーベル文学賞がボブ・ディラン氏に授与されることになりました。ノー

ベル財団は、彼と連絡をとろうとしていました。が、なかなかつかまりません。そして、遂にコンタクトを断念したという事件がありました。私は、彼が賞を貰うために歌ってきたわけではなく、それがフォーク・シンガーの生き方だと思うのでよいと思います。しかし、そのノーベル財団の選考委員の中には、「あいつの態度はけしからん」と怒り出す人が出てきました。その後、遂に賞を受けることになりましたが、授賞式を「先約があるから」と欠席しました。私もノーベル賞を貰う時になったら、ぜひ言ってみよう言葉です。人間は、目先の状況だけを見て、そして自分だけしか目に入らない行動をしがちです。

「ルールから離れることこそ、創造」

夏目漱石の『草枕』の冒頭は、「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」という出だしで始まります。日本は、主張を通していくとルールに縛られて窮屈になってしまいがちです。しかし、そのルールは人が作ったもので、与えられたものではありません。だから、予めルールを盲信、信奉してかかる必要はありません。新しいことを行なうならば、一旦、ルールがなかったら何ができるかを考えてみるべきだと思います。

「不完全であることを恐れない」

日本人が信じてやまない言葉かもしれませんが、「人の振り見て我が振り直す」

は、一見、よい言葉のように聞こえるかもしれませんが。共同体を作ろうという意識です。しかし、あえて言えば、「我が振り直す必要はない」と言うべきだと思います。個性の発揮に躊躇しなくてもよいと思います。変人であってもいいということです。一人だけ違った考えを持つてしまったかもしれないことを、くよくよ悔やむ必要はなく、それに躊躇しなくてもよいということです。

若い人に向けて、「大事にしてほしい言葉の一つは、『セレンディピティ』だ」と伝えていきます。日本語でぴったりの言葉がなかなか見つかりませんが、「思いがけず発見してしまう」ということです。これが科学技術や宇宙開発、そして、芸術を進めていく大きなドライバーだと思います。

「新たなページを開かないとより広い世界は見えてこない」

数年前、JRの車内で、「どうして日本人は英語が上達しないのか？」という広告が流れていました。答えの一つにあったのは、「日本人は完璧主義者で、今、見ているページを100%理解しないと次のページへ移ろうとしないからだ」と語られていました。これは、科学技術や宇宙開発、そして人文社会系でも同じように通用することだと思います。新しいページを開かないと、より広い世界は見えてこないということです。今、見ているページをめくるには勇気がいります。理解度は、100%ではないかもしれませんが。しか

し、不完全だと恐れていては、ダメです。新しいページを開かない限り、より広い世界は決して見えてくることはありません。これはとても重要なことだと思います。

「創造力を引き出す教育」

青森県からの依頼で、中学二年生向けの短期合宿プログラムに参加しました。理科の課題は、「子ども用のプール、一端から他端まで、手を触れずにうずらの卵を運びなさい」という課題でした。生徒たちの中でたった一人が、全く違う考え方を提案しました。発砲スチロールの板に紙コップが貼ってあり、それにストローが、斜めにさしてあります。「プレゼンテーションをしてください」と言われて彼が行ったことは、これを何と沈めたのです。「おや、潜水艦じゃないか」という感じです。そして手を離すと、フロートが浮き上がり、コップに水が満たされ、この水がストローをたどって吐き出され、推進力になりました。水の位置エネルギーを利用することで、エネルギーを蓄え、つまり、沈めるということとは、充電をしているということです。

私は、二時間のプログラムでは、どういう教育になるのか分らないと思っていました。その時間でも、創案して、そして試行錯誤で模型を作って、プレゼンテーションをして走らせたということが行われたということに驚きました。また、創造の芽吹きを感じました。こういう努力こそ、やっておくべきだと、心から思

いました。

「やれる理由を見つけて挑戦する」

講演では、いつも次の言葉で締めくくらせていただいています。テニスの錦織圭選手が親しんだ相田みつを氏の歌「一生燃焼 一生感動 一生不悟」です。一生悟れなくても一生懸命取り組んでみよう、不完全であっても挑戦をしよう、これが錦織選手の活躍を支えているのとことです。

やれる理由を見つけて挑戦しないかぎり、成果は得られない。できると信じて、自信を持って取り組んでみてはどうでしょうか。そんなことをやっても無駄だと思っただけなのではないかということです。分り切っているとは思わず、必ず行動に出ることが大切です。

やれる理由を見つけて挑戦するということ、先生方の力を通じて子どもたちに伝わるならば、日本の将来を明るくしていただけたらと思います。



生きる力を育成する三河教育

「学び合い、学び続ける教員として」

総務委員会

五十七年目を迎えた三河教育研究会（以下は三教研）は、「実践に学び、実践を創る」を合言葉に、常に、子どもの学びを中心に据えた教育活動を誠実に、また積極的に追究してきました。

三教研の強みは、各学校、地域で行った授業実践をもとに、若手、中堅、ベテランが共に切磋琢磨し合う機会が確実に保障されていることです。子どもに確かな学びをさせたいと切に願い、三河各地から集った会員が熱心に学び合い、成果や課題を共有し、自身の指導力の向上に役立てていることは、全国に誇れる確かな組織が確立されているからです。

本年度も、三教研の主たる各部会・委員会の研修会・研究会において、魅力と実効性のある研修活動が計画されています。また、教育研究におけるミドルリーダーの養成を目的とした授業力養成講座も八年目を迎えます。会員の皆様の積極的な参加を期待しています。そして、参加し、学んだことを各学校、地域に広げていただきたいと思います。

また、三教研の取り組みや各学校で実践された学習指導案を三教研のホームページや広報「教育 みかわ」に数多く掲載していきます。会員の皆様からの情報提供をお待ちしています。

新アドレス：www.sankyouden.jp

国語部会夏季研修会	8/8	豊橋
国語（書写）部会実技講習会	7/28	岡崎
愛知県社会科教育研究大会	10/24	田原
算数数学部会夏季研修会	8/2	新城
愛知県小中学校理科教育研究発表会	8/4	新城
愛知県生活科教育研究大会	8/4	蒲郡
愛知県小中学校音楽教育研究大会	10/24	蒲郡
愛知県造形教育研究協議会	11/8	刈谷
全国小学校体育科教育研究集会	8/23	豊橋
技術・家庭部会夏季研修会 小学校部会	8/2	田原
技術・家庭部会夏季研修会 中学校部会	8/4	幸田
愛知県英語教育研究大会	10/25	岡崎
愛知県道徳教育研究大会	11/8	岡崎
愛知県小中学校特別活動研究大会	8/10	岡崎
特別支援教育部会夏季研修会	8/2	碧南
養護教諭部会夏季研修会	8/3	蒲郡
愛知県養護教育研究大会	7/27	名古屋
総合的な学習部会夏季研修会	8/1	安城
ICT活用研究会	8/2	豊田
愛知県学校図書館研究大会	8/18	津島
愛知県統計教育研究発表会・講演会	11/29	名古屋
愛知県生徒指導研究大会	11/29	稲沢
愛知県へき地教育研究大会	10/24	北設
授業力養成講座Ⅰ（東三河）	8/23	蒲郡
授業力養成講座Ⅰ（西三河）	8/25	安城
授業力養成講座Ⅱ（東三河）	10/17	田原
授業力養成講座Ⅱ（東三河）	10/31	田原
授業力養成講座Ⅱ（西三河）	11/28	安城
授業力養成講座Ⅱ（西三河）	11/29	安城
授業力養成講座Ⅱ（西三河）	12/6	安城

理科

部会・委員会だより

自然を意欲的に追究し、

豊かな心と創造力を培う理科学習

理科部会では、長年にわたり、研究を積み重ね、子どもたちに豊かな心と創造力を培ってきました。

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が求められています。理科学習における主体的・対話的で深い学びを明らかにし、子どもたちの学びに還元できるように、我々教師が理解を深めていく必要があります。同時に、著しい科学技術の進歩に合わせ、常に新しい教材開発を行い、子どもの学びに生かしていくことが求められています。

そこで、本年度の夏季研修会では愛知県小中学校理科教育研究会と共催し、文部科学省国立教育政策研究所教育課程調査官遠山一郎氏をお迎えし、今後の理科教育が目指すべき方向性について、ご示唆をいただけるよう計画しました。また、分科会では、岡崎・豊田・豊橋・北設・豊川・西尾支部の工夫ある授業実践を提案していただき、研究協議を行うことで、先生方の日々の実践に生かしていただこうと考えています。研究発表会を通じて、三河の先生方みんなで勉強できるような会にしていきたいと思っています。

年度末には、今年度も『三河の理科教育いま』をまとめ、三河の先生方の取り組みを発信していきます。

- 愛知県小中学校理科教育研究発表会
- ・期日 平成二十九年八月四日（金）
- ・会場 新城文化会館
- ・日程 十二時二十分～十六時三十分
- ・講演 「今、理科教育に

何が求められているか」
文部科学省国立教育政策研究所
教育課程研究センター研究開発部
教育課程調査官 遠山一郎氏

理科部会夏季研修会は新城へ

新城市立鳳来寺小学校 大滝 輝久
今年度、新城文化会館で三教研理科部会夏季研修会が行われます。ただし、愛知県小中学校理科教育研究会と共催のため、三教研理科部会の名称ではありませんのでご注意ください。

新城市は、第二東名の新城ICができ、自家用車でのアクセスが便利になりました。また、東三河一帯でのジオパーク構想もあり、地形や地質的にも見所がたくさんあります。できれば、早めにお出かけいただき、それらの見学後に研修会に参加していただくと、より一層充実した夏休み的一天となることでしょう。

特別活動

豊かな心とたくましく

実践する力を育てる特別活動

～主体的・協働的に取り組む

集団活動を通して～（二年次）

特別活動部会は、研究テーマを「豊かな心とたくましく実践する力を育てる特別活動」、副題を「主体的・協働的に取り組む集団活動を通して」とし、二年次を迎えました。六月、二月に行われる委員会において、各地区の取り組みなどの情報交換を行い、三河地区の特別活動の水準を高めていきたいと考えています。

研究に関しては、研究集録『学級づくり これだけは！』の来年度の発刊をめざし、実践の積み上げと編集に取りかかります。これには、学級づくり懸命に取り組んでこられた先生方の英知を、三河全域の各地区から優れた実践事例として集め、広く紹介していきます。特に、これから増え続ける若い先生方が、生き生きと学級づくりを進めるための一助となり得る研究集録にすることをめざしています。

研修に関しては、八月十日に岡崎市の甲山会館にて愛知県小中学校特別活動研究大会を開催します。研究の副題にもある「主体的・協働的に取り組む集団活動」のテーマに沿った、各支部の実践をもとに協議を行います。多くの先生方に参加していただき、先生方の力量向上につながるような議論となるよう期待しています。

す。各支部からの多くの方の参加をお待ちしております。

（今年度の主な活動）

○愛知県小中学校特別活動研究大会

・期日 平成二十九年八月十日（木）

・会場 甲山会館（岡崎市）

・講演 「いじめ」の温故知新

株式会社エスケーイ社長

麓 聡一郎 氏

・小学校部会研究協議会

発表者 碧南・棚尾小 澤田瑞季先生

発表者 蒲郡・塩津小 小田大悟先生

・中学校部会研究協議会

発表者 刈谷・南中 杉田祥吾先生

発表者 岡崎・美川中 松田 司先生

甲山会館でお待ちしております

岡崎市立常盤中学校 宮澤 元紀

本年度、特別活動部会の夏季研修会は、愛知県小中学校特別活動研究大会として、岡崎市の甲山会館で行われます。講師に、株式会社エスケーイ社長、麓聡一郎氏をお招きし、講演会を行います。昨年度の夏季研修会におきましても、麓氏のご講演は大変ご好評でした。今年度は、「いじめ」の温故知新」というテーマで、現代のいじめ問題と向き合います。その後、二つの分科会に分かれ、各支部の代表者による提案をもとに研究協議を行います。優れた実践に触れ、充実した研究大会になることを期待しています。

特別支援教育

一人一人の教育的ニーズに

応じた教育のあり方をめざして

近年、特別支援教育を必要としている児童生徒は増加する傾向にあります。また、社会の変化や児童生徒の障害の重度・重複化、多様化が進む今日、これらのことに対応していくことが直近の課題となっています。そのため、今回の学習指導要領等の改訂で、教育課程全体を通じてインクルーシブ教育システムの構築をめざしていくことがポイントの一つとして挙げられています。

わたしたち特別支援教育に携わる者にとって、障害のある児童生徒に、個々の能力や可能性を最大限に伸ばし、社会参加するための基盤となる生きる力を培うことは、大変重要なことです。そのため、一人一人の教育的ニーズに応じた、適切な指導及び必要な支援を保障するための実践を積み重ねていきます。

四月十九日、附属岡崎中学校で開催された特別支援教育部第一回委員会議では、本年度も「一人一人の教育的ニーズに応じた教育のあり方をめざして」を研究主題として、研究を進めていくことが確認されました。年五回の委員会議や各小委員会を重ねながら、詳細について検討し、実のある活動にしていきたいと考えています。

本年度は、この研究主題に基づく実践の八年目になります。碧南市・高浜

碧南市文化会館で充実した一日を

高浜市立高浜小学校 杉浦 隆司

本年度、特別支援教育部会の夏季研修会は、左記の日程・内容で行われます。

・期日 平成二十九年八月二日（水）
・会場 碧南市文化会館・中部公民館
・日程 九時十分～十五時四十分
・内容

愛知教育大学教授吉岡恒生氏を講師としてお招きし、講演会を行います。その後、七つの分科会に分かれ、三河各支部の代表者による提案をもとに研究協議を行います。

優れた実践に触れ、これからの三河の特別支援教育を考えることができる機会です。多くの先生方にご参加いただき、充実した一日になることを期待しています。

碧南支部

地域の中で活躍できる生徒の育成
「大浜てらまちウォーキング」への

参加をととして

碧南市立南中学校

本校は碧南市の南部に位置し、昭和三十一年に開校された、本年度生徒数六九三名の学校です。衣浦港と矢作川に囲まれ、学区内の大浜地区には、たくさんのお寺が集まっています。大浜地区は、二〇〇〇年から国の「歩いて暮らせる街づくり」のモデル地区となり、その年の秋から「大浜てらまちウォーキング」が始まりました。目的は、大浜の歴史や文化を歩きながら見て、触れて、知ってもらうこと。本校では、この「大浜てらまちウォーキング」の開催当初から毎年八〇



縁日で活動する生徒の様子

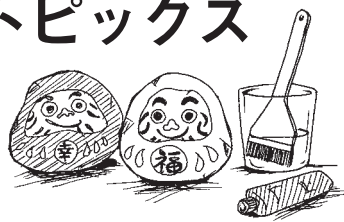
名ほどの生徒がボランティアスタッフとして活動に参加し、イベントを支え、盛り上げてきました。生徒たちは、自分たちの暮らす街を大切に、地域の中で多くの活躍をしてきました。

昨年度はまず、四つの係に分かれて活動を行いました。来場者への案内やイベントの説明をする案内所担当、大浜てらまち巡りスタンプラリーの参加者へスタンプの場所を教えたりカードに押印したりするお寺お手伝い担当、大浜陣屋広場での縁日で来場者に遊んでもらう縁日担当、お寺の風景や楽しんでいる来場者の様子を撮影した写真の応募を募るてらまちフォトコンテスト受付担当です。当日は、二万人以上の来場者があり、大盛況でした。

生徒たちは、イベントの場所が分からずに困っている参加者には進んで声をかけ、一緒に付き添って場所を案内したり、気持ちのよいあいさつでイベントを明るく盛り上げたりしていました。終了後に、市の担当の方から「南中学校のボランティア生徒がいなければ、この行事は成り立たなかった。」との言葉をいただくことができました。このように、今後も、地域の中で活躍できる生徒を育てていきたいと思っています。

(文責・小島 広明)

支部トピックス



高浜支部

高浜つ子の思いが広がる

「高浜市児童生徒美術展」

高浜市教育研究会造形部

高浜市は、小学校五校、中学校二校という規模の小さな市です。昭和五十四年から始まった「高浜市子ども造形展」は、二十三年で一旦幕を閉じました。しかし高浜市の造形部員の「高浜の子どもたちに、造形の楽しさ・工夫する面白さ」を伝えたいという熱意から、「高浜市児童生徒美術展」として復活を果たし、平成二十八年度で第十三回を迎えることができました。地元の「かわら美術館」と造形部が協力して、毎年一月の第二土曜日、日曜日に、かわら美術館内の展示会場で美術展を開きます。

小学校は、各学年五点、中学校は、各学年二十五点を目安に、図画工作と美術の授業で制作した代表児童生徒の作品を学校毎に展示しています。昨年度は初日、あいにくの雪の日になりましたが、二日間、およそ五百人の来場者の目を楽しませてくれました。「毎年、中学生の作品のレベルの高さに感動します」「どうやって作るのですか」等、

来場者の方々から感想や質問をいただきました。

毎年、二日目には、美術展と同時開催で、造形ワークショップ「美術館で先生と遊ぼう」を企画しています。昨年度は、新聞紙とお花紙を使って置物ダルマを作る「マイダルマ作り」と、アルミホイルとビー玉を使って作った不思議な動きをする卵と、トイレットペーパーの芯を使った「ふしぎな卵ときらきら万華鏡作り」の二講座を開きました。それぞれの講座を造形部の教職員四人で担当しました。「来年もやりたい」「自分で作ったものは、かわいい」等、子どもたちに大好評で、自分の作った作品を、大事そうに持ち帰っていました。

今後も美術館に足を運ぶような心豊かな大人に高浜つ子が育つよう、願いを込めて美術展を続けていきたいと思っています。

(文責・林田 博恵)



ワークショップ「マイダルマ作り」



外国籍生徒取り出し指導(上) 感動の体育祭(下)

未来を語れる保見中生 共に感動できる学級・ 学年づくりを目指して

豊田市立保見中学校

本校は豊田市のほぼ中央に位置し、外国人が多く居住する保見団地を学区に抱えています。外国籍生徒が六か国、約百名(全体の三割強)在籍する多文化共生の特色ある学校です。県や市からの教員や指導員加配も多く、通訳四名、ポルトガル語を話せる教員も在籍します。全職員で少人数やT.T指導、取り出しや入り込み指導等を行い、学力向上に努めています。

昨年度、創立七〇周年を迎え、様々な行事で趣向を凝らした取り組みを行いました。文化祭では、学校の歴史を振り返る劇やスライドを披露し、地域の方も共に当時は懐かしむことができました。生徒たちは行事にも授業にも熱心に取り組

み、市内でも活力あふれる学校になってきています。

しかし、三年生になると「受験の壁」が立ちほだかり、努力はしているが学力が伸び悩む生徒も多く、進路選択に苦慮しています。そこで、重点目標を主題のように設定して、どの生徒も将来に希望をもち、前向きに努力し続ける姿を大切にしてほしいと願い、指導を進めています。幸い、教師と生徒、生徒間の人間関係も良好で、「将来教師や保育士になりたい」という生徒が多く、卒業生の中には「この中学校で学べたことを誇りに思う」と話す外国籍生徒も多数います。

今年度からは、地域との連携もさらに深めて、豊田市の取り組みである「We love とよた」の実現に向けて、豊田市版コミュニティスクール申請を行い、学校に地域学校共働本部を設置しました。地域コーディネーターを配置し、地域の各関係団体やボランティアさんとのパイプ役をお願いしています。地域行事に参加したり、部活や授業支援に来てもらったりと、双方の活動を通して、地域に根を張り、郷土愛にあふれる人材を育てたいと考えています。そして、地域の中核として、生徒たちが温かい環境で教育を受けられるようになることを願っています。(文責・平林 輝久)

学 校 自 慢



心温まる

地域とのふれ合い活動

幸田町立坂崎小学校

本校は、豊かな自然に囲まれ、地域との温かなかわりが常と感じられる学区です。春の訪れとともに、鮮やかな黄色の水仙が学校の斜面や通路に咲き並びます。この水仙は、地元の方やPTAの役員さん、そして、本校の子どもたちとで、毎年、球根を植えて育てているのです。大人が球根を植える穴を掘り、子どもたちが球根をひとつひとつ並べ、丁寧に土をかぶせていきます。斜面で植える時は、子どもが転がってけがをしないように、役員さんたちがその下で見守ってくださいます。この共同作業には、大人と子どもの役割があることや「きれいな花がたくさん咲くように」と願う気持ちの共有ができるという

よさがあります。

地域と学校との交流活動は、この他にも多くあります。その一つに、坂崎学区のお年寄りの方が集まる「いきいきサロン」での交流があります。坂崎区と長嶺・久保田地区にあるサロンで、毎年、お年寄りとのふれ合いを楽しんでいます。「長・久いきいきサロンの会」に招待

された一年生は、コミュニケーションまで出かけ、学校で練習してきた歌を披露します。

この会の一番の交流活動は、子どもたちとお年寄りが一緒に行うゲームです。今年は、ゲームを企画する民生委員さんから担任に、長嶺・久保田地区にまつわる話を子どもにしてほしいと依頼がありました。交流会当日、一チーム三人の子どもたちが、お年寄りの席に行き、この話の中からクイズを出してもらいました。正解すると、次はじゃんけんをして、勝った子から丸い紙にクレヨンで色を塗ります。次に部屋の真ん中に用意された大きなキリンの胴体にその紙を張り付けます。これが終わると、別のお年寄りの席に行き、同様の活動を繰り返します。何人ものお年寄りとお年寄りが地域の特徴などをクイズで教えてもらったり、キリンの模様づくりも楽しめたりできるこのゲームの奥の深さに、参加者みんなが、「民生さん、すごい！」と、感激していました。

地域の温かさに多くふれることで、素直でやさしい子どもたちが育ちます。地域の方々



(文責・吉見 泉)

「長嶺・久保田キリンのすけ、キリンのひめ」にっこり笑顔のお年寄り子どもたち

研究校紹介

伝えたい・聞きたい思いをふくらめ

のびのびと学び合う子どもの育成

「聞く」「話す」活動を生かした「わくわく授業づくり」

みよし市立南部小学校

本校は平成二十八年度より、みよし市教育委員会研究委嘱を受け、研究主題を「伝えたい・聞きたい思いをふくらめ」のびのびと学び合う子どもの育成「聞く」「話す」活動を生かした「わくわく授業づくり」とし、研究を進めてきました。

「南部っ子」が目をはかりながら、仲間と関わりながら課題を追究し、考えを練り合い、「伝えたい」「聞きたい」という思いを強く、仲間と語り合う中で、全員で学びを深めていく授業を「わくわく授業」と名づけ、中部大学の小笠原豊先生を指導者に招き、心が動く、「わくわく授業」づくりを追究してきました。



「おおきなかぶ」を引っ張る子どもたち

本校の研究では、「外的わくわく」（課題との出会いによる意欲・関心・期待感の高まり）と「内的わくわく」（本時の目標に迫る「わかった・できた」という充実感）を引き出そうと日々試行錯誤しています。基本的な一時間の流れを①声出し活動②「めあて」の確認③課題との出会い④「外的わくわく」⑤まとめとして、二つの「わくわく」をその中で引き出すようにしています。そして単元を通して二つの「わくわく」を意識し、明確な問いをもつてわくわく感を追究できるように、単元構想の工夫をしてきました。

また、課題追究の場面では、ペアやグループでの話し合いを取り入れているため、「ことばスキル」を週に一回行い、よりよいかかわり合いができるように努めてきました。その他、一時間の授業の流れをホワイトボードに示して「見える化」し、見通しをもつて安心して学習に取り組めるようにするなど、学びスタイルの確立にも努めてきました。

十月二十七日（金）に研究発表会を行います。全クラスの授業とスキルタイム等を公開します。参観いただき、ご指導いただければ幸いです。

（文責・小澤 知里）

私の研究

仲間とかかわりながら、課題解決に向けて主体的に学ぶことができる体育学習

～「相手のいないところへアタック!! プレールボール」の実践を通して～

安城市立安城東部小学校 神谷 貴俊

一 はじめに

アクティブ・ラーニングという用語が多く取り上げられるようになりました。体育学習は身体活動を中心とした学習が大部分を占めるため、一見すると主体的に学習しているように見えます。しかし、「教師に指示された運動をしているだけ、ただみんなで楽しく活動しているだけ」といった授業になってしまいうことも多くあります。

こうしたことから、子どもたちが教材に対する願いをもち、課題解決に向けて、仲間とかかわりながら進んで体を動かし、運動技能を向上していく授業や、教師支援の在り方を研究していくことにしました。

二 実践について

プレールボールの楽しさでもあり難しさでもあるのが、ボールのバウンド調整と（味方同士の）距離の調整です。味方には捕りやすく打ちやすいボールを、相手には捕りにくいボールを返球することがゲームに勝つためには必要な要素となります。これらはゲームの中でしか身に付けることができない技能や感覚です。そこで、四十五分間の学習の中で最低でも

十回のゲームができるように計画しました。また、タブレットを活用して、チームや個人の動きを確認できるような環境づくりをしました。



タブレットで動きを確認する児童

単元前半では横一線に並んでしまい、ボールがつかない場面が多く見られました。しかし、ゲームを繰り返したり、映像を視聴したりするうちに、チームの改善点に気づき、パスを出す方向やプレーヤーの動き方などについて意見交換するようになりました。単元後半では、レシーブ、トス、アタックの三角形のフォーメーションを作り、それぞれの役割を確認した動きが徐々にできるようになってきました。学習カードの振り返りには「相手がいないところに打てた」や「相手が捕りにくい場所をねらった」などの記述も見られるようになりました。そして、多くの児童が「チームの連係」と「相手が捕りにくい返球」の大切さに気づき、ネット型のゲームの楽しさを味わうことができました。

三 おわりに

体育学習では、運動を繰り返し行い、自ら課題に気づき解決できるような場を十分に保障することが大切となります。主体的に学ぶ児童の姿を求め、これから研究を進めていこうと考えています。

教室の窓から

主体的に課題を追究できる子の育成
～六年生「MY野菜弁当」～

給食をつくらう！

豊橋市立下条小学校

熊谷 千尋

豊かな自然に恵まれ、校区も農業が盛んな本校では、地域の方々の協力を得ながら「食農教育」を進めてきました。校内にある教材園や校外の「すくすく下条つ子農園」では、毎年、夏野菜や冬野菜を育てています。六年生は、六年間の食農学習の集大成として、自分たちが育てたMY野菜を使って七月には弁当十二月には給食をつくっています。

野菜づくりが大好きな六年生は、「自分たちで畑づくりをしてみたい！」と、意欲満々でした。そこで、図書資料で調べ、肥料や苦土石灰をまき、慣れないくわの扱いや硬い土に苦戦しながらも何とか畑づくりを行い、自分たちの畝を完成させました。自分で育てるMY野菜を決めた子どもたちは、「最高の野菜を育てて、弁当や給食にして食べたい。」と意欲を高めていました。野菜の世話の仕方を家の人にインタビューしたり、図書資料で調べたりしながら実践していく中で、「害虫対策で農薬は使いたくないけれど、他によい方法がわからない」「本で調べた世話の中に『支柱の三本立て』とあるけれど、やり方がよくわからない」といっ

た、図書資料や家の人へのインタビューでも解決できない問題が出てきました。子どもたちの疑問点を解決していくために、地域の農業体験ボランティアの方(畑の先生)に教えていただくことにしました。野菜に合った正しい世話の仕方や害虫対策を教えていただき、子どもたちはすぐに実践していました。大切に育てたMY野菜を使って、栄養バランスや彩り、味つけなどを考えた献立が決まりました。前日から野菜の収穫をしたり、洗ったりして準備をし、家で何度も調理の練習をした成果を見せる子どもたちの手際よさに感心するばかりでした。MY野菜での弁当や給食づくりを通して、子どもたちは達成感を味わうとともに、日頃のご飯や給食を作ってくださる方々に感謝の気持ちをもつことができました。



畑の先生に世話の仕方を学ぶ子どもたち

私のコレクション

日本酒の王冠集め

西尾市立西野町小学校 石川 雅春

教育の話と結びつかずに恐縮ですが…。雪が雨のように降っている上越で、労働者たちがコップになみなみと注がれた冷酒を水のように飲んでいる光景に出会い、日本酒に男の美学を感じたのが二十代後半。それから私は日本酒(一升瓶)の王冠(蓋・キャップ)を集め始めた。一升瓶の空き瓶を集めるには場所を取りすぎるが、王冠なら部屋の机の上に置ける。「越乃寒梅」「雪中梅」「メ張鶴」…当時有名だった銘柄の王冠が、まるで勲章でも貰ったかのように並び出した。

といっても浴びるほど飲んでいたわけではない。どちらかというと一人静かに銘柄を選んで飲んでいたので、当初はそれほどたまらなかった。しかし、時折お邪魔していた和食店で王冠集めを話題にしてからは、店主が気にかけてくれるようになり、いつの間にか机上では収まり切らなくなった。本来は自分が飲み干したからこそ記念として捨てずに集めたのであるが、店主の好意を汲み、他人が飲み干したお酒までも集め始めた時点で、コレクターに変わっていた。時には酒蔵巡りをしたり、買いたい衝動を必死で押さえたり。

立体的な王冠のコルク部分はカッターナイフで切り取り、金切鋏も使い、銘柄入りの蓋部分のみを強力な両面テープで台紙に貼り付け保管した。

集めたのは十年ほど。日本酒をめっきり飲まなくなり、また、情け深かった店主が亡くなったこともあり、いつの間にか眠らせてしまっていた。

今、二十年ぶりに眺めてみると、あの時出会ったあの銘酒たち。あの味。あの場所。あの人。王冠からいろいろな物語が立ち現れて、夜空に煌めく星辰の響きのように、エールを送ってくれている。今宵は王冠を肴にしみじみと冷酒で一杯。うふふ。



個性あふれる日本酒の王冠

教育随想 (81)

〈あの子 どこの子 安城の子 うちの
トツァンの 顔知らぬ〉

安城市は、かつては台地であり、農耕
をするためには「ため池」の水に頼らざ
るを得ず、極めて貧しく枯れた土地でし
た。粘土質で大地の間を流れ

る小さな川沿いに、小規模な
水田があり、そこに集落はあ
りましたが、人々は常に水不
足に悩まされ、水争いが絶え
ませんでした。農民たちは、
苦境にあえいでいました。

〈嫁にやるなら 安城にやる
な 日がな一日 野良仕事〉

こうした状況を目の当たり
にしていた偉人が一人、猛然
と立ち上がりました。今から
二百五十年ほど前に生まれた
「都築弥厚」という人物です。
彼の計画は、矢作川の水を碧
海大地に引き込み、大規模な
新田開発を行うというビッグプロジェク
トでした。

そして、算学の大家であった石川喜平
の協力を得て測量を始めますが、水害を
招くと誤解した農民たちの強い反発を受
け、ついには夜中に密に行かねばなら
ないような状況でした。

〈弥厚ぎつねに だまされて 川は掘れ
ども 水はコンコン〉

夢 と 志



安城市教育委員会教育長
杉 山 春 記

それでも、苦難の末、四年の歳月を経
て測量を完成し、翌年には幕府へ願いを
提出しましたが、その許可が下りるには
さらに七年の歳月がかかりました。残念
ながら、弥厚はついにその年六十九歳で
亡くなってしまいました。それは、一枚
の測量図を残したのみの他界でした。

かくして、弥厚が没して約四十年後、
岡本兵松と伊豫田与八郎は、弥厚の遺志
を引継ぎ、明治十三年、弥厚の計画は「明

七年後に他界したのです。

四〇歳を過ぎても、五〇歳を過ぎても、
六〇歳を過ぎても、彼の「夢と志」は変
わりませんでした。強靱なこの意志力は、
まさに「生きる力」であり、大きな夢と
高い志を抱くことの大切さを教えてくれ
ています。

翻って思うに、昨今、子どもたちを取
り囲む環境は大きく変化してきていま
す。スマホの普及に伴ってか、目と目を
合わせ、顔と顔を突き合
わせたの会話は減り、機
械相手に、短い単語で意
思表示することに慣れ、
時にはトラブルにまで発
展しています。さらに、
ゲーム感覚でリセットの
意味を誤解してしまいま
す。

強い心で将来を切り拓
き、壁を乗り越えていつ
てほしいと強く思ってい
ます。強い心とは、単に
強靱な心ではなく、「し
なやかで折れない心」だ
と思っています。子ども
たちが、夢と志を抱き、命を大切にしま
がら、しなやかで折れない心で、たくま
しく育ってほしいと願うばかりです。

安城市和泉町の小さな林の中には、右
手に扇子を持った都築弥厚の銅像が、今
日も「夢と志」の大切さを語りかけてく
れています。

編集後記

子どもたちの意識や行動の変化を
探ったアンケート結果の記事が目にと
まりました。小中学生を対象に十
年ごとに、いくつかの質問に答えて
もらうものです。遊びと勉強のどち
らが大事かの問いでは、二十年前
に「遊び」が六割ほど、「勉強」が4
割ほどであった割合が逆転しており、
他にもいくつかの項目で価値観の変
化が伺えるとのことでした。私たち
は、過去の知識や経験、習慣を通じ
て、知らず知らずのうちに、心の中
に慣性の法則を作り出しがちです。
先輩各位が、三河の地に営々として
培ってこられた教育実践の重みを胸
に、切磋琢磨しながら歩を進めてい
くことの大切さを強く感じます。

さて、今夏も各部会・委員会では、
魅力と実効性のある研修会や研究会
が開催されます。三河各地の子ども
たちの輝く姿に触れ、実践と研究に
ついて語り合いましょ。

ご多用の中、原稿をお寄せいた
いた皆様に感謝申し上げます。

◆表紙の写真◆
「お田植え踊り」

撮影 新城市立東郷東小学校
石原美恵子 先生

◆カット◆
愛知教育大学附属特別支援学校
神谷 宜欣 先生